

サブウェイ

佐野 広実

第一話 誰か見ませんでしたか

一

バックヤードから事務室を抜け、駅の構内に戻ると、乗客にまじって勤務を再開した。

はた目には、落とし物でもして事務室に問い合わせをしていた客が出てきたとしか、見えないはずだ。

ほむらあけみ
穂村明美はデイバックをかつぎ直し、ホームに向かった。

まだ夕方のラッシュにはかかっていないので、地下鉄銀座駅にさほど人は行き交っていない。春先とはいえ、きょうは冷え込んでい
るから車両にも駅にも暖房が入っている。そのせいで少しのぼせて
しまったらしい。休憩所で化粧を直し、一枚セーターを脱いできた。

エスカレータを降り、日比谷線のホームに出ると、ちょうど北千
きたせん
住行きが出て行ったところだった。
じゆ

明美はベンチに腰を下ろし、それとなく周囲に視線をやった。

勤務のメインは列車内の警備だが、駅構内だとしても注意は払っておくのが基本だ。

この仕事に就いて三か月になる。

やつと慣れてきた気がする。半日ずっと地下鉄に揺られて路線を
行き来するだけだが、それなりに神経を使う。

楽な仕事とはいえなかった。

一般職員のように列車で移動するときは立っていなくてはならないという規則はないが、乗客に気取られないように、なにかあったときには迅速に、じんそくが原則だ。

なかめぐろ 中目黒方面行の列車が来る、とアナウンスが入った。

中年の女性が明美の降りてきたエスカレータからこちらに向かってくるのに気づいたのは、そのときだった。落とし物でもしたのか、眉をひそめて周囲に目を走らせている。よそ余所行きよその服装ではない。

ストラックスにブラウス、その上から焦げ茶色のカーディガンをはおっていた。手にはデパートの紙ショッパーを提げている。が、かなり古びていて、きょう買い物に行ってきたというわけではなさそうだ。たしか五、六年前にショッパーのデザインが変わったはずだが、手に提げていたのはフランス国旗のような色使いの以前のデザインだった。中に入っている物まではわからない。

声をかけようかと思ったが、その前にあちらから明美に目を止め

て近寄ってきた。

「いま何時でしょうか」

上体を傾け、困ったような顔が明美の前に来た。白髪が目立つ。少しばかり近づきすぎのように感じ、背筋をそらして形見の腕時計に目をやった。

「四時三十二分です」

女性はため息をついて、いったん上体を起こした。周囲に注意を払ってから、さらに尋ねてくる。

「ここ、日比谷線のホームですよね」

列車入線の轟音ごうおんに負けじと声を張り上げた。明美はとっさにホームドアに記されている灰色の地下鉄記号に目をやった。まさかとは思ったが、うっかり別の路線に来てしまった気がしたのだ。慣れないうちは自分がいまだこの路線のどのあたりにいるのか、わからなくなっただけのことであつた。

だが、間違つてはいない。ここは日比谷線銀座駅のホームだ。いままさに中目黒行きが停車し、ドアが開いている。

「ここは日比谷線です。どちらまで行かれるんですか」

発車ベルに問いが重なった。降りてきた乗客がエスカレータへ流れていく。

「どうしよう、困ったわ」

明美の問いが聞こえなかったのか、女性はひとりごとをつぶやいた。

ホームドアが閉じ、列車は走り出した。

「なにか落とし物でも、されましたか」

明美は問いかけつつ、あらためてその風体を確かめた。服装もシヨッパ―同様くたびれている。カーディガンの袖口はほころびていた。

「六歳なんですけれど」

「六歳」

思わず復唱していた。

「そう、まだ小学一年なんです。見かけませんでしたか」

せっぱく
切迫した調子に聞こえた。

「お子さんでしょうか」

明美は尋ねつつ、立ち上がっていた。事態が把握はあくできていないが、その様子からして、なにか起きていると感じた。

「ここで四時半になって」

女性は代々木よよぎ上原うえはらにある私立小学校の名前を口にした。そこに通っているという。

明美の頭に、地下鉄の路線図が浮かんだ。ルートとしては、代々木上原駅から千代田線で日比谷駅へ出て、そこから日比谷線に乗り

換えてひと駅だった。

腕時計はすでに四時三十七分を回っていた。

しかし、十分ほどの遅刻など、よくあることだろう。目下、列車は定刻通りに運行されている。つぎの列車に乗ってくるかもしれない。電車通学をさせている母親が少しばかり心配してホームまで迎えに来たのだろう。

「息子さんですか、それとも」

相手の気を落ち着かせるつもりで訊いた。

「ええ、息子です。四時半の約束なんです。ちゃんと連れてくるって」

「どなたかと一緒にいらっしゃるんですね」

あいつち
相槌を打つと、女性は息を詰め、おろおろとして首をわずかに振った。

「違うんです」

思いのほかきつい口調で視線をそらせ、明美をのけるようにしてホーム中央へ小走りに去って行く。

アナウンスが入った。間もなく北千住行きが来る。ホームには待っている客が増えていた。その客をかわしつつ走って行く女性の姿は、すでに見えなくなっている。

やはり、なにかおかしい。

明美は女性のあとを追った。茶色のカーディガンが目印になり、すぐに見つけられた。

轟音とともに列車がホームに入ってきて定位置に停まると、ドアが開いた。

乗客が降りてくる。

少し先にいた女性は、どのドアを見ればいいのかわからないらしく、左右へ必死に目を走らせている。

だが、小学生らしき姿は明美の目には降りたように見えなかった。女性は前方に行きかけては、すぐさま後方に足を向け、結局どちらにも進めないまま、降りてきた客の姿を一人ひとり必死に確かめようとしている。

にもかかわらず、通学の小学生らしき姿はない。

いないとわかったのか、女性は力なく震える両手で顔をおおい、膝を折ってしまった。

発車ベルに重なって、その口から悲鳴が上がった。

近くにいた客はさほど驚かなかったのか、ちらりと女に目をやっただけで、そのまま歩いていく。

反射的に明美は走り寄っていた。

「大丈夫ですか」

かがみ込み、その背中に手をやり、声をかけた。

女性は肩を震わせていたが、やっと両手を顔から離れた。

表情はこわばっているが、目がうつろだった。

ススム。

悲鳴は、たしかにそう聞こえた。

それは女性の息子の名前に違いない。

明美はその肩に手をかけ、抱え起こした。

二

車内警備というのは痴漢ちかんやスリの防止が任務となっていたが、ほかに乗客の介助かいじょや車内で困った状況にある乗客の相談に乗るのも任務のひとつだった。

むろん警察のように逮捕権があるわけではないから、どちらかといえば急病になった乗客への対処などがメインで、仕事に就ついてからの三か月、急病人をふたり、無線で駅に連絡し、救急隊員に引き継いだこともあった。

女性は気分がすぐれないようだったが、無線で連絡するほどでもなかった。自宅はどこかと尋ねると、近くだとこたえた。

そこで明美は事務室にいた若い駅員に構内で具合が悪くなった女性を家まで連れて行くと告げて、地上に出た。

泰明たいめい小学校の横を抜けたところにある四階建てマンションが、住居だった。かなり古ぼけていて、周囲の開発から取り残されたのがいちもくりようせん一目瞭然いちりょうぜんといった様子だ。

二階の三号室。表札には「大内洋子・晋おおうちようこ すずむ」とあった。

「ありがとうございます。もう大丈夫ですから」

部屋の鍵を開けると、早口で言い、明美が声をかける前にドアが閉まってしまった。

神経質な印象があったが、その理由が分かったのは、銀座駅に戻ってからだった。

「あなた、初めてだったんですね」

経緯けいゐを報告しておくつもりで事務室に行くと、年配の駅員のひとりが、低くうなった。

話によれば、ときたま現れるのだという。

「月に一回か二回ってところかな。時間は四時半。これはきっちりしている」

最初は二年前のことだったらしい。

「まさかと思ってるね。誘拐事件があったなんて、警察から連絡もなかったし」

報道規制はされるが、地下鉄にかかわる事案の場合、内々に警戒をするよう連絡があるという。

「でも、誘拐なんか起きてなかった。警察呼んだけど、事情を聞いてだけで、そのまま帰されたんです。ただ、五年前にはじっさいに誘拐があったって話でね」

ちらりとほかの駅員に目を走らせた。

五年前、息子の大内晋がいなくなったのは事実だった。小学校からの帰宅途中、消息を絶^たった。毎日銀座駅まで迎えに来ていた大内洋子は、その日なかなか改札を出てこない晋を心配し、構内に入った。

そして明美が座ったベンチに腰を下ろして晋が列車から降りてくるのを待っていた。だが、一時間過ぎてもその姿は現れなかった。学校に携帯電話で問い合わせたが、いつもと同じように下校したという。

代々木上原駅から乗ったのは防犯カメラで確認できたが、日比谷駅で日比谷線に乗り換えたのかどうか、そこまでは確認できなかった。

「失踪といっても、小学生がひとりでするわけもない。で、誘拐かかってことになった。そのころはわたしも銀座駅にいたわけじゃないからまた聞きだけだ」

誘拐事件として捜査が開始され、失踪の翌日犯人から身代金を要求する電話が自宅にかかってきた。一千万を用意して指示に従え。

父親が高級食パンのチェーン店オーナーで、金があるのを犯人は知っていたようだ。

しかし、身代金の受け渡し場所に犯人は現れず、一週間後に息子は隅田川すみだがわの下流で遺体となって発見された。

そこまで聞いて、明美も以前ニュースで見たのを思い出した。

「犯人はまだ見つかっていなかったですよね」

「そう。警察はまだ探してるだろうけどね。時効なくなったし」

「じゃ、息子を迎えに来ているつもりってことですか」

首をかしげたが、それもあるだろうと駅員はこたえた。そして、
「またもや事務室にいる者の目を気にし、片手を口の横にあてた。」

「当時、身代金の受け渡し場所に犯人が指定したのが」

言葉を切って、人差し指で床を何度か指し示した。

つまり、洋子が毎日息子を迎えに来ていた銀座駅を指定してきた
というのだ。

「日比谷線のホームに、午後四時半」

駅員が、わかるだろうと言いたげな目配せをしてきた。

「つまり、身代金を持って、ときどき現れる、と」

「そういうこと。ときどき息子さんのこと思い出すと居てもたつてもいられなくなるのかもしれないね」

同情めいた調子だった。

そこまで話すと、駅員は思い出したように時計に目をやって、それじゃと軽く敬礼^{けいらい}して見せ、事務室を飛び出していった。なにか勤務があるのか、話を切り上げたかったのか、どちらでもあるようだった。

明美もそれをきっかけに、事務室を出た。あらためて日比谷線のホームに降りていく。

午後六時を回っていたから、乗客もかなり増えだしている。

ちようどやってきた北千住行きに乗り込んだ。

満員ではないが、席は埋まっている。ドア脇に立ち、窓に映る自分の顔に目をやった。大内洋子の事情を聞いて、わずかにこわばっているように思えた。話をしてくれた駅員も、もしかしたら明美の食い入るような目に圧倒されて話を切り上げたのかもしれない。

身代金の引き渡しに失敗したせいで、息子が帰ってこなかった。

大内洋子はそう思い込んでしまったのだろう。そして、ときたま前後の見境もなく「身代金」を手にホームにやってくる。

それを無駄なことと言って切り捨てるつもりは、明美にはなかった。

自分も似たような思いを抱いている。

それがきっかけで、この仕事についたようなものだった。

二年前、その事件は起きた。

明美が大学四年の冬のことだ。すでに就職は決まっていた。私立の教育学部で体育の免許を取れるところだったから、教師になろうと漠然ぼくせんと考え、秋に行われた小学校の教員試験にも合格し、あとは卒業を待ただけだった。ちかごろはブラックな職場といわれているが、無理して企業に入って好きでもないことをするより、よほどましな気がしていた。

当時つき合っていた法学部の的場まとはやうち要一も国家公務員試験に受かり、大学最後のクリスマスと一緒に過ごそうと計画を立てていた。約束したわけではなかったが、将来は一緒になると互いに思っていた。

だが、その要一が急死した。

クリスマス・イブの夜のことだ。

新宿駅北口で待ち合わせたのに、一時間過ぎても現れない。携帯に何度もかけたが、通じなかった。

日が暮れ出し、何組もの楽しげなカップルが通り過ぎるのを横目に、どうしようかと迷った。下宿は荻窪にあり、何度も行ったことがあるから、行ってみようかと思ったとき、携帯が振動した。

表示を見ると、要一からだった。

あわてて出ると、咳払いせきばらいが聞こえた。

「こちら五反田署ですが、この携帯の持ち主とは、どういったご関

係でしょうか」

言われている意味が、わからなかった。要一の携帯をなぜ警察が持っているのか。なぜ五反田などという方向違いの場所から連絡が入ったのか。いや、そもそも要一はどうしたのか。

問いがいくつもめまぐるしく頭の中をめぐった。

「友人ですが」

用心しつつそれだけ答えると、相手は急せき込むようにこたえた。

「じつは事件に巻き込まれたようで、怪我をされて、いまから至急来ていただけますか」

五反田にある救急病院の名前を口にしたが、怪我をしたことだけで頭がいっぱいになり、病院の名前を二度聞き直した。

「大丈夫なんでしょうか」

かろうじて尋ね返すと、相手はそれには答えず、急いでお願いますと言って通話を切った。

しばし呆然ぼうぜんとしていたようだった。あまり記憶がない。逸はやる思いを抑え、北口改札へ向かった。膝が震えていたのは覚えている。なんとか山手線に乗り込んだが、あまりの遅さに怒鳴りたくなかった。

五反田駅からタクシーに乗った。繁華街と反対方向に五分ほどのところに、救急病院があった。

すでに暗くなっていて、外来受付は閉まっている。夜間救急の入

り口に走っていくと、そこにスーツ姿の男がひとり立っていた。

「電話のかたですか」

男はそう尋ねてきた。それだけで通じた。うなずくと、警察手帳を示した。

「ご家族に連絡したいのですが」

「的場さんの、容体は」

普段は要一と呼んでいたが、相手の気配を感じ、恐る恐るそう尋ねた。

「残念ですが、つい先ほど」

その言葉を耳にすると同時に、貧血を起こしたように目の前が暗くなり、倒れていた……。

周囲の乗客がいつせいにドアに向かって動き出し、明美は我を取り戻した。

あわてて見回すと、終点の北千住に到着していた。

三

その日は午後八時までの勤務で、さらに三往復してから渋谷の詰所に戻った。

職員は勤務につく時点で、当日重点的に乗車する路線を三路線ほど指定される。本来なら別路線にも乗車すべきだったが、いったん座席に腰を下ろすと、緊張が切れてしまった。車内の警戒もまるでできなかった。

詰所は銀座線渋谷駅の事務室にパーテーションで区切られて設置されている。本部は大手町駅おおてまちにあるが、まだ本格的な導入前の部署なので、主要駅にある詰所は仮設だった。明美のような警備員たちは全部で百五十人ほどおり、東京メトロと都営地下鉄が共同で設立した警備の子会社に所属している。車内警備員の運用が正式に決定されるかどうかは、明美たちの勤務が防犯対策として有効かどうかにかかっていた。

職員は主要駅に十五ほどある詰所のひとつに所属し、早番なら午前九時から午後四時までの勤務、遅番は正午から午後八時までの勤務となる。正式に運用が開始されればさらに勤務時間帯が広がるかもしれないという話だった。

早番、遅番、休日というサイクルだから、明日は休みになる。

装備していた身分証、無線機器、警備員用の乗車カードを所定の保管庫に戻し、それから勤務報告書を手に統括官の三木剛みきつよしのデスクに向かった。

「報告書お願いします」

クリップボードごと差し出すと、警備服をつけた三木がデスクから立ち上がり、軽くうなずいて受け取った。

以前は警視庁で防犯課に勤務していたと聞いている。挙措きよそにきびきびしたものが感じられるのは、それだけ頼もしく映った。三木は丁寧に報告書に目を通す。とはいえ、かつての仕事柄か、目の動きは速い。書かれている内容も、通常ならどの路線をどう移動したかということを書き記すだけだ。ただ、きようは違った。

「銀座駅で女性を保護。これは」

クリップボードから視線を明美に向けてきた。事情を簡単に説明する。

「なるほど。わかりました」

記憶にとどめておこうとするようにまばたきをしたあと、クリップボードをデスクに置いた。

「では点呼を」

三木の言葉に、明美は少し姿勢を正した。

「車内警備員、穂村明美。通常勤務終わります」

「お疲れさまでした」

敬礼はしない。ただ互いに頭を軽くさげるだけだった。

それを終えると、三木の顔に笑みが浮かぶ。

「もう三か月か。どうだ、慣れてきたかな」

採用時の面接官でもあったせいか、三木は明美を気にかけてくれている。あとで知ったが、亡くなった父親とは大学が同期だったという。だから明美も三木を上司として信頼していた。

「仕事自体は慣れましたけど、なんていうか忍耐が必要ってというか」苦笑しつつ答えると、一瞬三木は困ったような表情をした。

「忍耐は当然だが、この仕事は何も起きないことが一番だ。そのためにある」

うっかり口をすべらせたのに気づいた。「何も起きないようにするのが仕事」というのは、採用されたあと新木場しんきばにある研修センターで何度も聞かされた言葉だった。

「すみません」

素直にあやまった。

「まあ、帰ってゆっくり休め」

すぐに笑顔に戻った三木は、そう言った。一礼して辞じそうとするど、思い出したように呼び止められた。

「お母さんとは連絡取ってるのか」

「ええ、ときどき」

三木はなにか言いたそうだったが、うなずいただけだった。明美はまた一礼し、事務室を出た。

たまたまだったとはいえ、家庭の事情まで知られているのは、と

きには億劫おっくうになる。母親は田端の家にひとりで住んでおり、明美はこの仕事についたのをきっかけに中目黒にマンションを借りて住んでいる。

「あれ、早かったじゃん」

事務室を出たところで声がかかった。

目を上げると、どっしりした身体があった。研修で一緒だった町村光江むらみつえだった。夫が東京メトロの職員で、こどもの手が離れたのをきっかけに仕事を探していたとき、警備職員を応募しているのを目に止め、なんとなく受けたら合格したといっていた。

「きょう、行きますか」

「決まってるでしょ。それが楽しみで仕事やってるんだから」

たいてい遅番のあと、渋谷駅の詰所に所属した「同期」で一杯ひっかけるのが通例で、センター街にあるバーがたまり場になっていた。その日あった出来事を話したり、相談に乗ったり乗ってもらったり、ようするにストレスの発散場だった。もちろん、男の職員は仲間に入れない。

「なによ、あんた行かないの」

不服そうに口をとがらせた町村に、明美は片手を振った。

「行きますよ、もちろん」

いましがたまで、今夜はまっすぐ帰ろうと思っていたのに、つい

答えていた。どうせこのまま帰っても、ひとりで飲むことに変わりはない。

一緒に行こうという町村が報告を終えるのを待って、渋谷の街に出た。

思ったより冷え込んでいる。

スクランブル交差点の信号が青になり、人がどっと押し寄せる。四月になったというのに、オーバーコート姿が多かった。その人の群れをすり抜けてセンター街に入ってしまった。

しばらく歩いて左手のビルの地下に「エルスウェーニョ」はあった。スペイン語で「夢」の意味らしいが、冗談半分に仲間は「エルニーニョ」と呼んでいた。

階段を下りて木製のドアの中に入ると、外の寒さと騒がしさがすっと消えた。ランプに照らし出された店は白壁以外床もテーブルも茶色に統一されている。カウンターとボックス席がある定番の店だ。今夜はまだ、カウンターに男女の客がひと組いるだけだ。十時を過ぎてから流行る店だった。

顔なじみになったちよび髭ひげのマスターがいらっしやいと声をかけてから、ちらりと視線を奥に向けた。

先に来ていたふたりは、いちばん奥のボックスを占領していた。

これでフルメンバーだった。

「お疲れえ」

OLから転職したという原口由紀はらくちゆきがグラスを持ち上げてみせる。三十は過ぎていゝらしいが、はつきりした年齢は口にしない。派手な格好はいつでもパーティに行けるためだと言っていた。

もうひとり原口由紀より少し年上で町村よりは下の奥野孝子おくのたかこ。眼鏡をいつもかけていて、以前はどこかの会社で秘書をしていたという。同じOLだったとは思えない差があつて、奥野孝子は飲むときも静かに飲む。

年齢で言えば、明美が一番年下ということになるから、それなりにかからかわれたり、かわいがられたりはしていた。

仕事柄、体力の有無なども採用の基準になる。明美は大学で駅伝の選手をやつており、いまでも非番の日には十キロは走り込んでゐる。町村は柔道二段、原口はテニス、奥野は空手三段という触れ込みだった。ただ、じつさいにそれぞれの技を見たことはない。

町村光江はともかく、ほかのふたりに関しては転職してこの職場に入つてきていた。いわばもともと歩いていたコースを外れて別の道を選んだわけで、なにかしら事情があるのはたしかだろう。もつとも、それを互いに話すまでの仲にはなっていない。それは明美にしても同様だった。男物の腕時計をはめていることも、尋ねられないし、まだ口にしてはいない。

勤務中、三人と地下鉄の車内や構内で出くわしたこともない。顔見知りの同僚と出会ったとしても、長話をするのは禁じられているし、目礼もくれいくらいにとどめるように言われていた。同時に百五十人ほど車内警備をしている者がいるとしても、知っている者は限られているし、それだけ地下鉄網が広いということでもあった。

だから顔を合わせるとすれば、出勤時と退勤時くらいだし、この店に集まったときだけの関係とも言えた。

席につくと、町村はさっそくビールとパスタを注文した。明美もビールとサンドイッチだ。遅番はタイミングを逃すと夕食がこの時間になってしまうので、そうなる。

あらためて四人で乾杯する。

話題はなんでもありだった。いい男はいないかと毎度ぼやく原口由紀の愚痴ぐちや、息子が野球部で頑張っているという町村光江の自慢じまんなどを、たいていこのふたりが話す。おのずと奥野孝子と明美は、聞く側になることが多かった。

ただ、この日は明美が銀座駅での顛末てんまつを話題にした。この中で以前彼女を見かけた者がいるなら、もう少し大内洋子のことや事件の経緯を知りたかったからだ。真っすぐ帰らずにここまで来たのは、そのためだったとも言える。

しかし、三人は誰も大内洋子のことを知らなかった。

この仕事について三か月しか経っていないし、銀座線のホームに午後四時半にいたとしても、大内洋子が必ず姿を現すとも限らない。

「へえ、そんなおばさんいるんだ」

原口由紀が呆れたあきような声をあげた。

「こどもも亡くすつてのは、つらいわよ。その気持ちはわかる」

町村光代がため息をついた。

奥野孝子がどう答えるか気になって、明美は目をやった。いつも優等生的なことを口にするが、決して押しつけがましくはない。秘書をやっていたせいだろう。だから、四人の内では、いちばん頼りにもなる。

グラスを両手で囲いつつ、奥野孝子は首をかしげた。

「明美さん、どうしてその人のことが気になるのかな」

「どうしてって」

それが自分の境遇に似ていることは口にしたくなかった。ただ、これだけは聞きたいと思った。

「いまさらどうしようもないことにずっとこだわっているのって、いいのかどうか。ちょっと気になって」

奥野孝子は目を伏せ、しばし考えるような間があった。町村光江も原口由紀も、自然と奥野孝子に視線を注いでいる。

やがて、奥野孝子がうなずいた。

「亡くなった息子さんは戻ってこない。でも、だからさっさと忘れてつきへ進めっていうのは、その人の気持ちを考えていないと思うわ。その女の人は、たぶん息子さんが戻ってくるって信じることで、なんとか生きていけているような気がする」

「え、どういうこと」

原口由紀が首をかしげた。

「こだわっているから生きてられるってことでしょ」

町村光江が半ば呆れつつ説明する。

こだわりのあるからこそ、生きていられる。

明美は酔いが回りつつある頭に、その言葉だけは刻み込んだ。

四

ふたたび大内洋子に出会ったのは、それから二週間後のことだった。

早番でいくつかの路線を回ったあと、人形町にんぎょうまちで浅草線から日比谷線に乗り換えた。

それまでも毎日、午後四時半になると、来ているだろうかと頭をかすめてはいた。その日担当する路線を好きに決められるわけではない。ただ、銀座を通る丸ノ内線、銀座線、日比谷線の三本が指定

された路線になったときは、わざと午後四時半前後に銀座に停車する列車に乗ったりもしていた。

その日は早番で勤務時間は午後四時までだから、本来なら真つすぐ渋谷の詰所に戻って報告をしなくてはならなかった。

だが、なぜか大内洋子が来ているような気がしたのだ。

最後部の車両から降り立つと、そこに見覚えのある姿を認めた。あの時と同じ服装で、紙のショッパーを手に、ホームにたたずんでいた。

「大内さん」

声をかけると、びくりと肩を震わせ、こわこわと振り返ってきた。

「覚えてますか」

警戒する目の色が和らいだ。

ああと短いため息をついて、明美だと理解できたようだった。

「この前は申し訳ありませんでした」

冷静に頭を下げる様子には、どこにも取り乱した気配はない。

「わたしは穂村明美といいます。地下鉄の車内警備をしています」

職務を告げたとき、大内洋子はわずかに身構えたようだったが、すぐに平静を取り戻した。

「ちよっと座りませんか」

ベンチにうながすと、大内洋子はショッパーを抱えて腰を下ろし

た。

自分はいったい何をしようというのか。

明美はよくわかっていないながらも、口を開いた。

「失礼ですが、息子さんのこと、聞かせていただけませんか」

いぶかしげな視線が向けられ、それから寂しげな苦笑が起きた。

「そうね。地下鉄で仕事をしているなら、話は聞いていてもおかしくないわよね」

「この前お会いしたあと、ご事情は知りました」

正直に答えた。大内洋子はかすかにうなずいた。

「こんなことをしたって無駄なのは、よくわかっています。端から見れば変に思われるのもね」

「だったら、なぜ」

「わかってはいるけれど、納得はしていない。そういうことかしら」
自分自身に問いかけるような口ぶりだった。

納得。

的場要一が急に亡くなったことは、たしかにわかっていた。しかし、納得はできていない。

病院に駆けつけたとき、遺体を目にしても要一だとは思いたくなかった。

大内洋子の置かれている状況は、自分の経てきた状況と同じなの

だ。とすれば、いま自分がこうして地下鉄の車内警備をしているのも、要一の死を納得できていないからだろう。

「三年前、つき合っていた人がいたんです」

考える前に口をつけていた。あわててつけ加えた。

「聞いてもらえますか」

大内洋子は不思議そうな顔で覗き込んできたが、黙ってうなずいた。

同じ大学で知り合い、つき合いはじめ、将来は結婚も考えていた相手が、急に亡くなった。

「なぜそんなことになったのか、わからないんです。死因は脳内出血。強く頭を打ったのが原因だったようですけれど。警察は倒れていた周辺の防犯カメラをたどってくれて、したら地下鉄の麻布あさぶ十番駅じゅうばんで誰かと揉めて殴られた画像が見つかったんです。いったんは意識を取り戻して、地下鉄を使って五反田まで来て、そこで倒れたようでした」

北千住行きの列車が到着し、乗客が降りてきた。いったん明美は口をつぐんでいたが、列車が発車するとふたたびつき話を話した。出した。

「警察はいざこざの相手の行方を調べてくれました。麻布十番駅から大江戸線に乗って森下もりしたまで行ったのは、わかったんです。でも、

そこからどこへ向かったのかわからなくなって、犯人は捕まってい
ません」

当時見せられた防犯カメラの男の姿は、明美の脳裏に焼き付いて
いた。黒いダウンコートにジーンズ。荷物は持っていないかった。髪
の毛は茶髪で長い。ただ解像度をいくら高めても、顔ははっきりし
なかった。年齢は二十から三十。身長百七十から八十。いかつい身
体つきで肩をいからせて大股で歩く。

その犯人を自分の手で見つけようと思ったのが、車内警備を志望
したきっかけだった。

あわただしく葬儀そうぎが執り行われ、要一の遺骨きょうりは郷里の兵庫に行
ってしまった。自分の人生が足元から急に崩れ、大学を卒業しても
教師の職にはつかず、家にこもる日々が二年近くつづいた。

「あなたも、そうなのね」

大内洋子が納得できたといった様子で何度かうなづく。

左腕にはめた腕時計に手をやった。

「これ、彼の形見なんです」

男物の時計だが、さほどごつくはない。亡くなったときにはめて
いたものだ。

「誰にも言えなかったんですけど、大内さんならわかってもらえる
かと」

「もちろん、わかるわ。人を殺しておいて罪にも問われないような者がいるのは、許せない」

「それに、あの日新宿で待ち合わせていたのに、どうして麻布十番駅にいたのか。わたしに隠し事でもしていたんじゃないかって、疑ったりして、自分が嫌になることもあるんです」

まったく赤の他人相手なのに、明美の口は勝手に抑えていたものを吐き出していた。赤の他人だからこそ話せるのかもしれないが、だとしても喋りすぎだと気づいた。

「息子さんのこと、聞かせてもらえませんか」
頭をひと振りしてから、大内洋子に顔を向けた。

大内洋子はちよつと宙に目をやってから、ほほえ微笑んだ。

「晋っていうんですけれど、ひとりっ子でね。大事に育ててきたんです。なかなか妊娠にんしんできなかつたから、生まれたときには夫もすごく喜んでくれたのよ。でも、あの事件のあと、晋がいなくなつたのが原因で夫とはうまくいかなくなつてね」

中目黒行きの列車が到着して、発車していった。だが、そんなことは気にもしていないのか、大内洋子は言葉をつづける。

「ときどきふつと、まだどこか近くにいるんじゃないかって思ったりして。そういうとき、どうしてもここに来てしまうの。ここに来れば、いつか地下鉄から晋が降りてくるんじゃないかって。ただい

まって、いつものように手を振って走ってくるんじゃないかって。お金さえ渡せば、元のように戻るかもしれないって。だから、こうして」

抱えているショッパーに目を落とす。

「これ、当時用意した紙袋そのままなの。犯人がこの紙袋って指定してきたのよ。ただ、中に入っているものはちよつと違うんだけど」
覗いてみるというように袋の口を向けてきた。中には札束のぞに似せた紙の束が入っている。そこまで認めたとき、明美は息をのんだ。

紙束の横に、果物ナイフがあった。

「犯人が来たら、お金を渡す代わりに」

言葉を切って、明美に視線を向けた。

すでにその目はうつろになってしまっていた。

五

奥野孝子の言ったことは間違っていない。

こだわることでもなんとか生きていける。二度と戻ってこないとわかっていて失ったものを追いかけることが、かえって生きる糧かてになっ
っているのだ。

ただ、そのこだわりに呑み込まれてしまうと、生きていること自

体が社会とずれていってしまう。

大内洋子はその意味でバランスを崩していると明美は感じた。

果物ナイフは持ち歩かない方がいいと忠告して別れたが、要注意かもしれない。もし誰かを「犯人」だと思いついてしまったとしたら、ためらわずに「犯人」を刺してしまうだろう。

銀座駅の事務室にも告げておきはしたが、それが抑止につながるかどうかはわからない。

「それって、新興宗教にハマるパターンと似てるよね」

翌日遅番を終えたあと「エルニーニョ」で事情を話したとき、メソソールの煙草を手にしつつ、原口由紀は冷ややかにつぶやいた。

本人を前にしたことがないからだろうが、その口ぶりは明美には冷笑的に聞こえた。ただたしかに、救いを求めるのが亡くなった息子なのか宗教なのかの違いだけのような気もした。

一歩踏み間違えれば、自分も大内洋子と同じことになってしまう。気をつけなければ。

そう明美は感じた。要一が亡くなったあと、しばらくは何もする気力が起きず、やがて突然ふりかかった理不尽さに怒りを覚えた。それが自分の手で犯人を見つけようという決意につながった。そのためにこの仕事について。

むろんいまは怒りが湧きあがることは少なくなっていたが、消え

去るはずもない。弱まったわけでもなく、深いところに息をひそめている。

それがふたたび爆発するなら、それは犯人を追い詰め、捕まえたときだろう。

だが、捕まえてどうしたいのか。

単に警察に引き渡すだけかといわれれば、違う。犯人と対面したとき、もし果物ナイフを持っていたとしたら。

そのとき自分がどういう行動を取るか、わからない。

いままでそういった危険と隣り合わせにいたことに気づきもしなかった。

大内洋子は、明美が無意識に押し込めていた思いに気づかせてくれたのかもしれない。

「嘘は悪いかもしれないけど、人を呪わば穴ふたつってことだね」

町村光江がそう言うと、原口由紀がなにそれという顔をして、光江が面倒くさそうにことわざの説明をした。

「まったく近頃の若いのは」

「悪かったわね。どうせバカですから。ねえ、意味知ってた」

煙を吐いて、明美に訊いてきた。

「知ってました。すみません」

「あやまることないわよ。ほら、近頃の若いのも意味知ってるし」
「じゃ、あんただけってことで」

「ですよねえ」

由紀がわざとらしくこたえ、大げさな仕草で身体を背もたれになへなど倒した。

「でも」

それまで黙って三人のやりとりを聞いていた奥野孝子が口を開いた。

「人はそんな簡単に、人を殺せないと思うわ。たとえば我が子を殺した相手でも」

「それならいいんですけど、あのとときの目を思い出すと、ちょっと不安です」

「殺してやりたいって思うのと、本当に殺すことのあいだには、大きな違いがあるはずよ。もし同じなら、世の中殺し合いばかりになっている。そうじゃないかしら」

なるほど。誰にだって殺してやりたいと思っている者のひとりやふたりはいる。殺さないまでも、死んでくれればいいのにと思ったりすることはあるだろう。そう思った者が実際に行動に移していたら、きりがない。原口や町村と違い、さすが奥野だ。

納得していると、ふっと奥野孝子の顔が近づいた。

「明美さんも、その大内とかいう女の人にこだわりすぎているんじゃないかな」

「え」

誤解するなど言いたげに奥野は首を軽く振って笑みを作った。

「明美さんが素直になんとかしたいと思っっているのはわかるし、いけないとは思わない。わたしたちの仕事は困っている乗客のサポートをすることだから、みんなそういう思いを」

言葉を切って、眼鏡が由紀の方に向けられた。

「はいはい。わたしだってね、持ってますよ、それくらい」

「だと思うの。ただ、のめり込むと判断を間違うこともあるっていう気がするわ」

「あー、そうだね。自分のこどもがかわいいからって、悪さしたのにあやまらせもしない親っているしね」

光江が大きくうなずいてビールをあおった。

自分はそんなことはない。

そう思いはしたが、そのときは口ごたえせず、明美は黙っていた。それからしばらくは、なにこともなく過ぎた。

明美も意識的に淡々と任務をこなすように努めた。もちろん、困っている乗客の力になるという基本は忘れなかったが、思い入れが過ぎないように注意をした。

三日置きに集まる四人の場でも、特に大内洋子の話題は出さなかったし、奥野たちも聞き出そうとはしなかった。休日は相変わらず十キロ走り込み、余計なことは考えないようにした。

だが、五月の大型連休が終わった日、事件は発生した。

六

その日は大江戸線、半蔵門線はんぞうもん、新宿線の三路線が担当だった。

遅番で渋谷から半蔵門線に乗り込み、北千住まで。折り返して吉駅で新宿線に乗り換え、本八幡もとやわたまで行き、新宿へ折り返す。そこから大江戸線の内回りに乗った。一本をまるまる乗り続けるのではなく、こまめに下車してつぎの列車に乗り込むから、それなりに時間はかかる。

途中、住吉駅すみよしで乗り換えるときスカイツリーへ行くのに迷っている東南アジア系の四人の家族づれに身振り手振りで行き方を教え、新宿線小川町駅おがわまちから乗ってきたベビーカーを押す母親が市ヶ谷駅いちがやで降りるまで、注意をしていた。泣き止まない子どもに、周囲の乗客がいらついているのは見て取れた。以前なら母親に近づいて一緒にあやしたが、それが度を超した干渉かんじょうかもしれないと考え始めていた。

自分の任務は、泣き止まない子どもにいらついた乗客が母親に対してなにかしらの文句や、場合によつたら暴力を振るつたりするのを防ぐことだと考え直したのだ。

親子は無事に市ヶ谷で降りていった。

新宿から大江戸線に乗り、内回りを春日駅かすがまで来たとき、無線から声が流れ出した。

いままで何度か通信指令からの通達が流れたことはあつたが、めつたにあることではない。痴漢が逃走中とか、人身事故の連絡といつたことに限られていた。

明美は耳に入れたワイヤレスイヤホンを手で押さえ、聞き取ろうとした。

——日比谷線築地駅つぎじにて、児童一名行方不明。付近を乗車中の職員は注意されたし。小学二年生の女兒。身長百十センチ、学校からの帰宅途中で、上野から乗り込んだ模様。紺の制服制帽。赤いランドセル。名前はアライリサ。

列車は春日駅に入ろうとしていた。とつさに腕時計を見た。午後五時三十二分。

ここからだと築地には移動しにくいが、丸ノ内線で銀座まで移動はできる。

迷わず明美は駅に降りていた。まっすぐ事務室へ走る。

無線では情報が少なかった。

銀座に近いのが気になっていた。日比谷線であることも。

まさかとは思いつつ、疑念は晴れなかった。

春日駅の事務室で身分証を呈示して状況を聞きたいと申し出た。

「母親が駅まで迎えに来ていたようですが、改札から出てこないというので駅事務室に問い合わせたようです」

応対した明美と同年齢の女性駅員はそう教えてくれた。子供の名前は新井理沙という字を書くようだ。

「携帯はまだ持たせていなかったようで、位置情報もありません」
「帰ってくる時間は何時だったんですか」

「四時半前後だったらしいですが」

その言葉が、確信めいたものを抱かせた。大内洋子がなにかしらかかわっているのではないか。

明美は礼を言って、事務室を飛び出した。春日駅と丸ノ内線の後楽園駅は、南北線のホームをはさんで通路でつながっている。その通路を走り抜けた。

ホームに出ると、荻窪行きがちょうどホームに入ってくるところだった。

列車に乗り込んでから、車内を後方に歩いて行った。すぐに改札を出られるようにするためだ。

十二分ほどで銀座駅に到着した。事務室に走り、きょう大内洋子が来ていたかどうかを確かめる。

事務室にいた駅員たちは、誰も見ていなかった。

勝手な思い込みか。

いったん思い直したが、万が一のこともある。

明美は改札を出て地上に出た。

すであたりはネオンの明かりに満ちていた。

泰明小学校の脇を走り、見覚えのあるマンションにたどり着いた。

息を整えて階段をあがる。通路をたどり、大内洋子の部屋の前へ

進む。知らぬ間に忍び足になっていた。

「大内洋子・晋」の表札をたしかめると、チャイムを押して、身体を壁に隠した。

待つ間もなく取っ手が回され、ドアが開く。

笑顔を作って、開いたドアに近づけた。

「こんにちは」

驚いたような大内洋子の顔が目の前にあった。チェーンはかかっていない。

「どうかしたんですか」

戸惑った調子で尋ねてくる。

「ちよっと近くまで来たもので、どうしてるかなって」

答えつつ、一瞬視線を落とす。

沓脱くつめぎに小ぶりのエナメル靴が揃えてある。男物ではない。女物だ。

そう見て取った瞬間、素早く片足をあいだに突っ込み、ドアを引き開けた。

明美は大内洋子を押し戻すようにして部屋に入った。

ワンルームのマンションは質素で、中央にテーブルがあるだけだった。そのテーブルにちよこんと座り込んでいる女の子がいた。

土足で駆け上がり、女の子をかばうようにかがみ込んだ。

「新井理沙ちゃんね」

その問いに、女の子は目を丸くしたまま、なにもこたえない。

「ちょっと、待って」

背後で大内洋子の震える声があった。

振り返ると、立ちすくんでいるその顔が青ざめているのがわかった。

「待ってちょうだい、お願いだから」

七

「お手柄だな」

渋谷詰所に戻って報告を終えると、統括官の三木が微笑んだ。

「ありがとうございます」

多少の後ろめたさがあったが、そう答えた。

母親に手を取られて去って行く新井理沙が、白い歯を見せて手を振ってきた姿が浮かぶ。

築地駅の事務室で待っていた母親のところへ理沙を連れて行き、

明美は事情をこう説明した。

娘さんは寝過ごして築地駅を過ぎてしまい、目が覚めたのが銀座駅だった。銀座には何度も来ているから、反対方向に行く列車に乗らず、歩いて帰ろうと考えた。そこで地上に出たが、やはり道に迷ってしまった。

明美がそうではないかと思当をつけ、銀座の街を探していたら、運よく見つけられた。そう、作り話で納得させた。

「たしかに地下鉄内にいるとはかぎらないものな。まあ、任務そっちのけというのは褒められないが」

「気をつけます」

明美は一礼して三木の前からさがった。

緊張感が一気に解けた。

事務室を出たところに、奥野孝子が待っていた。あとのふたりは先に「エルニーニョ」に行ったようだ。

目を交わすと、奥野が先に立って歩き出した。

「これでよかったと思いますか」

明美が後ろへつきながら、尋ねた。渋谷に戻ってきたときには、すでに例の四人には明美が行方不明だったこどもを見つけ出したという話は伝わっていた。ただ、本当のところを四人には手短かに話してあった。

「まるく収まったんだし、誰も文句ないと思うわ」

「でも」

言いかけると、孝子は立ち止まって明美に顔を向けた。

「こう考えればいいと思う。法律や規則ばかりに捕らわれていると、かえって憎しみを生み出す。だから、憎しみを生み出さないような解決方法を考える。たまには法律や規則を破ってでも」

「憎しみを、生み出さないようにする」

「そう。明美さんだって、今回任務を離れた。離れたからこそ、こどもを見つけられた。もし、本当のことを報告していたら、こどもの母親は憎しみを感じるだろうし、大内っていう人も、あなたを憎む」

「わたしを」

そうかもしれないかった。

「誘拐犯人」という汚名おめいを着せてしまえば、それが本当のことであっても、通報した明美を憎むかもしれない。いや、大内洋子が憎ま

なくとも、明美には後ろめたさが残っただろう。

奥野はふたたび背中を向けて歩き出した。

明美も歩き出す。

スクランブル交差点のところまで互いに黙りこくって歩いた。

歩行者用信号が青に変わる。

「あの」

奥野に声をかけた。

「わたし、今夜は帰ります」

ほんのわずか明美の顔に視線を向けた奥野は、あっさりと応じた。

「わかった。ふたりにはそう言うっておくわ」

「すみません」

「間違っているとは、思わない」

「え」

訊き返そうとしたときには、奥野孝子は点滅を始めていた交差点を小走りにセンター街の方に行ってしまっていた。

明美はため息をつき、東横線の駅に向かった。

「誘拐」といっても、悪意がなかったのはたしかだった。ただ、亡くなった息子の代わりに、ほんの少し子どもと接したただけだ。

——少し一緒にいたかっただけなのよ。

マンションで大内洋子が口にした言葉を思い出す。

流産した母親が、他人の赤ん坊を盗み出すことがあると、以前聞いたことがあった。もちろん、金のためなどではない。ただ、失った赤ん坊の代わりに、べつの赤ん坊をその手に抱きしめたい。ただそれだけのために、やってしまうという。

大内洋子もそれと同じだった。

新井理沙はなんら危害を加えられていなかった。それどころか、進んで大内洋子についてマンションにまで行っていた。

午後四時半。

しばらく間があったが、きょうもまた息子が戻ってくるかもしれないと思って、大内洋子は紙ショッピングパーを手に銀座駅へ出かけた。

四時半を回り、しばしうろろしていると、中目黒行きおぼつかの列車が出て行ったあと、大きなランドセルを背負ったこどもが、覚束ない足取りでエスカレーターの方にやってくるのが見えた。

大内洋子は思わず声をかけていた。

制服は上野の方にある学校だと知っていた。どうしたのかと尋ねると、築地で降りなくてはいけなかったが、寝てしまっていたという。

だったら送って行ってあげよう、ただその前に、ちょっとだけおぼちゃんのところに来てケーキと一緒に食べないかと、おそろおそ

る訊いた。

逃げ出すかと思ったが、意外にもこくりとうなずいた。手を取ってエスカレーターに乗り、名前を尋ねた。新井理沙。おばさんは大内っていうの。よろしくね。

誰にも気づかれないまま改札を抜け、道々いろいろな話をした。

学校のこと、勉強のこと、友だちのこと、好きなゲームのこと。

大内洋子も、息子を亡くしていまひとりで暮らしていて寂しいのだと言った。ときどき、息子が戻ってくるかもしれないと思って、あのホームに行くのだと教えた。

不思議そうな顔をしていたが、理沙は、だったらわたしが代わりになってあげると無邪気に答えたそうだ。

——がらんとした玄関に、あの子の靴があるだけで、うれしかった。

大内洋子は、そうも言っていた。

部屋にあまり、途中で買ってきたケーキを紙シヨッパーの中に入れてあった果物ナイフで切り分け、一緒にお茶をした。それからまたいろいろな話をし、宿題を手伝った。それが終わると折り紙を教え、あやとりをして遊んだ。

部屋に乗り込んだときには気にも留めなかったが、じっさいふたりは黄色の毛糸で作った輪であやとりをしている最中だった。理沙

の両手にからまっていた毛糸に明美が気づいたのは、話を聞いてからだった。

そろそろ送り返さなくてはと思っていたところに、乗り込んだのが明美だったというわけだ。

ただ、大内洋子の説明の中で、ひとつだけ疑念が残った。本当に送り返すところだったのか、どうか。

どんな理由があるかと、これは誘拐だ。

明美は、理沙の耳を気にしながらも、言うだけのことは言った。観念したように、大内洋子はうなだれた。

——ほんの少し、一緒にいたかっただけ。それだけなの。晋がいたときにしてあげたことを、もう一度してみたかった。

宙に目を投げてこたえた大内洋子の表情に、嘘はないようだった。その視線の先に、明美の目も吸い寄せられた。

小さな仏壇があり、そこに写真が立てかけてあった。それが亡くなった大内晋なのは確かだ。男と女の違いはあるが、どこことなく新井理沙に面影が似ている。少し一緒にいたかったというのは本当だろう。

そんな大内洋子を、誰が裁けるだろう。少なくとも、自分には無理だ。

明美は、そう思った。いや、そもそもこれを「誘拐」と呼べるの

だろうか。

わからなかった。

大人ふたりの話には関心がなさそうに、熱心にあやとりをひとり
で続けている理沙に目をやった。

テーブルには鶴つる、亀かめ、蛙かえる、兜かぶとといった折り紙が散らばっている。
本当に、一緒に遊んでいただけなのだ。

明美は、理沙の名前を呼び、顔を近づけた。

「お願いがあるの」

手を休めて、三つ編みの顔が向けられた。

「これからお母さんのところにわたしが理沙ちゃんを連れていくけれど、ここに来たこと、誰にも言わないって約束してほしいの」

こうすることにしたと、大内洋子に目配せした。何か口を開きかけた大内に黙っているようにと首を振った。

「どうして」

不思議そうに理沙は尋ねた。

「ここに来たってほかの人に知られるとね、大内のおばさんが警察に捕まっちゃうのよ」

理沙の視線が大内洋子に向けられた。

「だめだよ、そんなの」

明美は理沙をこちらに向かせた。

「だったら約束して。ここに来たことは内緒。ずっと銀座の街をながめて歩いていた」

こくりとうなずいた。

「銀ブラっていうんでしょ。知ってる」

ひとりでに大内と目が合って、苦笑した。

「そう。銀ブラよ。学校からの帰りにちよつと寄り道しただけ」

「わかった」

進んで小指を差し出した。明美は指切りをし、それから理沙にランドセルを背負わせ、帽子をかぶせた。

「ありがとう」

立ち上がって玄関に向かう明美と理沙に、腰を抜かしたように座ったままの大内洋子が言った。泣くのをこらえているのか、声がつまっていた。

「またあやとり、教えてね」

理沙は靴を履き終わると、そう無邪気に言った。

大内洋子はうなずき、それから悲しげに首を振った。

そして明美は築地駅まで理沙を連れて行ったのだった。

東横線が地上に出て、速度を落とし始めた。

これでよかったのだと、もう一度自分に言い聞かせた。

同時に、もう二度と大内洋子は銀座駅のホームに現れないのではないかとも思った。亡くなった息子に対する強いこだわりが、突拍子もないことをさせてしまうと理解したはずだからだ。

たぶん息子へのこだわりも、少しは治まるのではないだろうか。そうであってほしいと、明美は思った。

中目黒駅で降り、マンションに帰り着くと、ドアを開く。

「ただいま」

習慣で真っ暗な部屋に向かって、小さく声をかける。

電灯をつけ、ベッドの横に立てかけてある額の中の写真に、もう一度挨拶をし、腕時計を外して横に置く。

きょうあったことを、要一にもゆっくり話したかった。

どんな感想を持つか、夢の中で答えてくれることを期待しつつ。